ゆるっと恋をしよう

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゆるっと恋をしよう

【Ｎコード】
Ｎ３３９６Ｗ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
お爺さんの勝手な約束で女子中学校である七森中に入学することとなった恵。男一人、残り女子の中に女装しながら学校生活を歩むこととに……

ゆるゆりのオリジナルものです。基本的には主人公×京子ですが、百合分のためにゆりカップルを作ります。

第一話　まさかの男の娘（前書き）

六甲水「というわけで、初めて一周年記念のその一です。」

恵「何で一話目から俺が大変な目に……」

彩「ガンバレ、お兄ちゃん。」

六甲水「ファイト。」

恵「マジで泣きたい。」

第一話　まさかの男の娘

それは突然の事だった。はじまりは一枚の手紙からだった。

「父さん。これどういうことだよ。」

俺はリビングに居る父親にとある事を問い詰めた。

「おぉ、恵。どうしたんだ？そんな怒った顔して……」

「どうしたんだ。じゃないよ。これだよ。」

父親にその手紙を見せた。父親はその手紙を受け取ると不思議そうな顔をしていた。

「これがどうしたんだ？中学校の入学式の案内じゃないか。」

「何で俺が彩と同じ中学校に行かないといけないんだよ」

「あれ？お兄ちゃん。私とじゃ嫌なの？」

とリビングに入ってきた妹である彩がやってきた。

「そういう訳じゃなくって、何で男であるこの俺が、女子中である七森中に入学するんだよ。明らかに間違いだろ。」

そう、俺宛に届いた手紙は……七森中の入学案内だった。

「ふむ、実はな恵。これは爺様と七森中の校長との約束でな。もし

爺様の孫が男の子で女の子みたいに可愛く育っていたら……女子中学校に入学させようという話なんだ。」

「俺は今ほど死んだ爺さんのことを恨むよ。」

「まぁ、まぁ、お兄ちゃん。男の子にしては可愛いじゃん。」

「フォローになってないからな。彩」

そう、俺の容姿はかなり女の子に近いものであった。普段縛っている長い髪、男の子には見えない女の子っぽい顔立ち。そして、女の子っぽいスラっとした手足。悲しいことに男ではなく、女の子に近いものであった。

「ちなみにお前の事は七森中には話しておいたから、安心しろ」

「安心できねぇぇぇぇーーーー」

ピンポーン

そんな時に家のインターホンが鳴った。

「あ、来たみたいだよ。」

「誰が来たんだよ。」

彩が玄関まで行き、その来訪者を連れてきた。その来訪者は……

「やっほ～恵。」

やってきたのは俺と彩の共通の幼なじみである歳納京子であった。
「京子姉。何でこんな時に京子姉なんだよ。せめて結衣姉かあかりのほうが良かった。」
「ぶ～、何だよ。その嫌そうな顔は、折角恵のお父さんから話聞いて、より女の子っぽくしにきたのに……」
「待て、馬鹿父。京子姉たちに話したのか？」
「もちろん、お前をフォローするためには彩だけじゃ大変だからな。京子ちゃんたちに協力してもらおうと思ってな。ありがたいだろ」
「あぁ、凄くありがた迷惑だよ。とりあえず京子姉。もう帰って……」
ふっと京子姉と彩の方を見ると、二人は楽しそうに……
「なぁなぁ、これとか似合うんじゃないの？」
「あ、いいね。お兄ちゃん。似合いそうだよ。」
「二人とも、何を楽しそうに女物の服を着せようとしてるんだよ。」
「えぇ～折角女の子になるんだから、私服から女物に……」
「京子姉。俺は全く女の子になる気はないからな。」
軽くツッコミを入れると彩がとあるモノを俺に差し出した。

「お兄ちゃん。まずは体育の着替えのために下着から……」

「何かもうこの家いやだぁぁぁぁぁぁーーーーー」

第二話　やはり幼なじみは大切なものである（前書き）

六甲水「やっと、二話書けた」

恵「今回は前回の続きだよな」

六甲水「うん、未だにあかりとか結衣とかでないけど……」

第二話　やはり幼なじみは大切なものである

「はぁ、どうしよう」

いきなり女子中に入学することとなり、さらには妹と幼馴染に女物の服を着せられそうになり、耐え切れずに思わず家を飛び出し、近くの公園のブランコに座っていた。

「いきなり飛び出しちゃったけど、家に戻っても心配されるより、無理やり女物着せられそうだな。はぁ、このまま家出しようかな？」

ネガティブな考えをしながら、ため息をついていると公園の入口に見知った姿を発見した。それは……京子姉だった。

「おっ、やっと見つけた。もう、いきなり出ていっちゃうから心配したよ。」

「京子姉。」

「さすがに悪ふざけ過ぎたかな？」

京子姉はそう言って、両手を合わせて謝ってきた。俺はそんな京子姉を見て……

「……別に京子姉の悪ふざけは今に始まったことじゃないでしょ、いつから一緒にいると思ってるんだよ。」

「えっと、子供の頃からだよね。懐かしいな。この公園で会ったん

だよね。」

「そうそう、あかりや結衣姉と一緒にね。まぁ、あの時の京子姉は今と違ってお淑やかだよね」

「私、今でもお淑やかだけどな。」

京子姉は頭を掻きながらそんな事を言う。何だかさっきまで落ち込んでいたのが今ではすっかりそんな気分では無くなってきた。

「さてと、家に帰ろうかな。」

「ん、結局七森中に行くのやめるの？折角幼なじみ全員が集まるのに……」

「いや、何だか女子中だからってどうでも良くなってきたし、それに辛くなったら京子姉に助けてもらえばいいかなって、」

「そっか、それじゃあ、帰ろっか。」

笑顔で言いながら俺に手を差し伸べた京子姉。俺はその手をゆっくりと握りしめるのであった。

京子姉と一緒に家に帰り、俺は親父がいる書斎に入った。書斎の外では京子姉と彩が待っていてくれる。

「親父。」

「恵、帰ってきたのか。それでどうするんだ？」

「俺、やっぱり七森中に行こうと思ってる。確かに女装とか男として恥ずかし、辛いこととかあるけど、京子姉がいるから頑張れる気がするんだ。」

親父に言いたいことを、伝えたい気持ちを言い切ると親父は微笑みながら立ち上がり、俺の頭を撫でた。

「そうか、悪いな爺様の約束を守らせるためにつらい思いをすることとなって、だが、お前が行きたいというならこれ以上は何も言わない。頑張れよ。」

「うん」

自分の意志をしっかり聞かせ、俺は書斎を出ようとした。そんな時だった。親父がボソッと呟いた。

「それにしても恵は本当に京子ちゃんが好きだな」

「へっ、」

「京子ちゃんがいるから頑張れるんだろ」

「ばっ、何言ってるんだよ。別にそんな事は……」

「いいんだよ。否定しなくて、なんせお前にとって京子ちゃんははつ……」

親父が言い切る前に、俺は急いで書斎を出た。まさか親父にあの事がバレているなんて……

「はぁ、」

「どうしたの？ため息なんてついて」

書斎の前で待っていた京子姉と彩は心配そうな表情をしていた。

「いや、別に……」

とりあえず当の本人にはバレていなくってよかったと思う今日この日だった。

そして3月から4月となり、俺は女装をして七森中に入学することとなった。

「やっぱりスカートはスースーするな。」

「お兄ちゃん。似合ってるよ。あ、今日からはお姉ちゃんって呼んだほうがいいよね」

同じ制服を着た彩が俺を茶化す。俺は軽く綾の頭を叩いた。

「それは学校限定だ。家では普通に呼べ」

「うぅ、頭は叩かれた。」

そんな風に妹と学校へ行く準備をしていると、呼び鈴がなった。きっと京子姉が迎えに来てくれたんだ。

「早く行こうぜ。待たせるのも悪いし」

「うん、」

こうして俺の女装生活は始まるのであった。それにしても、バレたりしないよな。女装

第二話　やはり幼なじみは大切なものである（後書き）

六甲水「う～ん、」

恵「どうしたんだ？」

六甲水「京子ってこんなかんじだったっけ？何か違うような」

恵「別にいいだろ。」

六甲水「そうだね。所で恵。」

恵「あんだよ。」

六甲水「ちゃんと女の子っぽい口調しないと」

恵「うっ、」

六甲水「ほら、ガンバレ」

恵「そ、そうですね。」

第三話　やっぱりあかりは……（前書き）

六甲水「第三話です」

恵「三話だな」

六甲水「こら、君はこれから女になるんだから、女の子の口調で喋らなきゃ」

恵「やっぱり。」

第三話　やっぱりあかりは……

入学式当日、京子姉ともう一人の幼なじみの結衣姉が家まで迎えに来た。結衣姉は俺の姿を見て驚いていた。

「……やっぱり女装なんだ。」

「俺だって好きでこんな格好してるわけじゃないんだよ。」

「まぁ、事情は聞いてるけど……正直言っていいか？」

結衣姉は真剣な表情で俺を見つめた。もしかして何かおかしい所があるのか気になったのだが……

「恵って本当に女の子っぽいよな。」

「結衣姉、俺、結衣姉はそれだけは言わないと思ってたのに……」

「お兄ちゃん。リボンとかつけてみようよ。きっと似合うよ。」

彩ものりのりで俺を女の子っぽくしたがっているし……京子姉とはいうと……

「よぉーし、恵と彩を迎えに来れたことだし、次はあかりの所に行くか」

「あかりも同じ学校だっけ？」

「あかりちゃんと同じ学校。同じクラスになれたらいいな～」

彩は顔を赤らめながらそんな事を言っていた。最初に言っておこう。彩は幼なじみの一人赤座あかりのことが好きである。ここ最近彩の部屋に入ったことはないが、実際、彩の部屋にはあかりの写真が飾ってあるらしい。

（とはいえ、その事知ってるのは兄である俺だけだからな。）

四人であかりを迎えに行き、今はあかりの家の前に来ていた。京子

姉は家のインターホンを鳴らしまくった。すると家の中でドタバタと大きな物音を聞こえた。そしてしばらくしてから……

「おまたせ～」

あかりが出てきた。だが、そのあかりは七森中の制服ではなく……私服にランドセルだった。

「……」

「……」

「……」

「あかりちゃんかわいい」

あかりの格好を見て、ただ見つめるだけの俺、京子姉、結衣姉。あかりのドジっぷりを見て悶えている妹。本当に何というか……

「ふぇぇぇ、あかり、中学生になったんだっけ。」

「とりあえず早く着替えてこい。」

結衣姉がそんな事を言うのであった。

あかりが着替え終わるまで家で待つこととなった俺達。まだ時間もあるから入学式早々遅刻はしないと思うが……

「それにしても、まさか中学にあがったことを忘れるなんて……あかりらしいな。」

「昔からそうだろ。」

俺と結衣姉がそんな事を話していると、京子姉と彩が突然立ち上がり、

「よし、暇だから散歩しよう」

「そうだね。」

「いや、そうだねって」

「京子姉、散歩なんかしてる暇ないんじゃないのか？あかりも直ぐに着替えてきそうだし」

「恵、この家を散歩しようという話だよ。あんまりあかりの家に来ること無いし、ここは色々と……」

「そうだね。色々と」

京子姉はただ本当に楽しみたいだけに聞こえるけど、彩、お前は何か不純に聞こえるから困る。

とりあえずあかりが着替え終わるまであかりの家を散歩することとなった。一階から歩くことになり、二階にあがるため、階段を上がるとき、ふっと階段の先を見ると……

「ごふっ」

「ど、どうした。恵。いきなりおかしな声を出して」

「い、いや、何でもないよ。結衣姉。」

「そ、それならいいけど……」

心配する結衣姉。何であんな声を出したかなんて結衣姉や、彩にだって言えない。まして京子姉にだって……だって、見えたんだから……

（く、クラゲのパンツはないだろ。さすがに……）

この事は一生誰にも話さないでおこうと俺は思ったのだった。

二階を散策していると京子姉があるものを見て顔を赤らめていた。

「どうしたんだ？きょうこ……姉」

何故京子姉が珍しく顔を赤らめていたのか理由がわかった。それは……洗濯物の中にあかりの物らしきパンツが干してあったのだが……そのパンツは、さっき京子姉が今日履いていたパンツと同じクラゲの絵が書かれていたパンツだった。

「あぁ、今日の京子のパンツと同じだな。」

「な、何で知ってるの？」

「さっき見えたから」

結衣姉は全く動じずにそんな事を言うが……男である俺自身。かなり恥ずかしかったぞ。

「お待たせ～って、何であかりの洗濯物見てるの！？」

ようやく着替えを終えたあかりが戻ってきた。あかりは必死に洗濯物を体で隠すのであった。

とりあえずようやく学校へ行けそうになっただったが、何故かあかりが不思議そうな表情で俺を見つめていた。

「どうした……じゃなかった。どうしたの？」

まだ家の中だったら男の口調で喋れるが、さすがに外だと女の口調でしゃべらないと……

「なんで恵ちゃんは女の子の制服着てるの？」

「なんでって、父さんから聞いてないの？」

「恵ちゃんのお父さんから？あかり何も聞いてないけど、さっきから何で恵ちゃんが女の子の格好してるか気になってたんだけど……」

「その事を説明すると遅刻するから後でいいかな？」

またあの説明をしなきゃいけないと思うと朝から大変だな。俺……じゃなかった私。

第三話　やっぱりあかりは……（後書き）

六甲水「ようやくあかりと結衣の登場だけど……あかり出番が少ないな」

あかり「ひどいよ。あかり、ここでも出番少ないの？」

六甲水「うん、」

第４話　娯楽部入部！（前書き）

かなり間が空いてしまい、すみません。今回はちなつちゃんの登場です

第４話　娯楽部入部！

ようやく入学式を迎えることとなった俺……いや、私はというあかりと同じクラスとなるのであった。ちなみに妹は隣のクラスとなった。

そしてなんやかんやあって放課後となった。

「あれ？あかりの自己紹介は？」

「いやぁ～時が過ぎるのは早いわね。」

「ねぇ、アニメであったあかりの自己紹介は？ねぇ、結構恥ずかしい思いをしたあの自己紹介は？あかりの見せ場だよね。」

「さて、京子姉たちがいる部室にでも行きましょうか？あかりちゃん」

「ふぇぇぇん～小説でもあかりは影が薄いんだ～」

あかりが言っていることを全部スルーする私。ただ心の中で思えることはただひとつだった。あかり……不憫だ。

「「恵、あかり、彩ちゃん。入学&娯楽部入部おめでとーー！」」

「何かわざわざありがとう二人とも」

「わーい！祝え、祝え。」

（喜んでるあかりちゃん可愛い。）

彩はまぁいつもの調子であかりを見つめているとして、あかりはさっきまで泣いていたのが嘘のように大喜びをしていた。それにしても私達が今いる場所って……

「ねぇ、結衣姉。ここって茶道部だけど勝手に使ってていいの？というか娯楽部って何をするか知らないけれど……」

「ん、あぁ、この茶道部は廃部になってもう使われてないから、そこを私達がこっそり好きに使ってるんだ。まぁ、娯楽部はこうしてだらだら過ごすことを目的に……」

「ふふ、甘いな結衣。」

京子姉が立ち上がりながらあることを言い出した。こういう時の京子姉はろくでもないことを言い出すんだよね。

「何だよ。京子？」

「こうして娯楽部も新たに三人も入部してくれたんだ。だったらいつもみたいにだらだら過ごしてちゃだめだと思う。」

私と結衣姉は京子姉の突然の提案を聞いて、呆れる私達。まぁ京子姉のこういったことはよくあることだから慣れたけど……

「それで、京子。何をするんだ？」

「そうだね～刺激的なこと！」

ということでみんなで刺激的なことについて話し合うことになった。

「いつも思うんだけどさ。電車がジェットコースターだったらいいよね。」

ジェットコースターみたいな電車か……それって下手したら死人が出るよね。特に満員電車の時とか……

「京子姉。それは多分刺激的だけど、危ない気がするよ。」

「えぇ～、じゃあ、めっちゃ速い観覧車とか」

めっちゃ速い観覧車……うん、新しい絶叫マシンの誕生だな。

「京子姉。それ凄くいいよ」←絶叫マシン好き

「おぉ、恵はわかってくれるか。」

「いや、それどうやって乗り降りするんだよ。」

結衣姉の突っ込みを聞くと京子姉は

「えっと、そん時だけ止まるとか……」

「それはひどいな」

話し合っているなか、少しだけお手洗いに行きたくなり、あかりと一緒に行くのであったが、またもやあかりが変なことを言い出した。

「あれ？あかり。全然喋ってないよね」

「いや、気のせいじゃないかしら？裏ではいっぱい話してたじゃない」

「表では全然喋っていないことになるよね！？」

「……気のせいよ。」

「またはぐらかせられた！はぁ、あかりって影が薄いんだ。」

う～んあんまりいじめすぎてあかりが可哀想になってきた。とりあえず励まさなきゃ、

「でも、ほら、今でも十分あかりって目立ってるわよ。でも、ほら、私みたいに女装してる子がいるせいで影が薄いのよ」

「そ、そうかな？」

「う、うん。あかりは十分目立ってる。」

「えへへ～嬉しいな。」

まぁ、京子姉が大好きなミラクるんにそっくりな女の子とか出てきたらあかりの影が本当に薄くなりそうだけど……まさかそんなことないよね。

部室に戻るとまだ刺激的なことについて話し合っていた。すると京子姉が私達が帰ってきたのに気がついた。

「あっ、おかえり。」

「まだ刺激的なことについて話してたの？」

「うん、中々いいのがなくってね。」

「……京子。先に謝っておく」

結衣姉が唐突にそんなことを言い出す。すると私の方を向いて……

「恵！」

「なに？」

「えいっ」

結衣姉がおもむろに京子姉のスカートを掴んで、思いっきり捲った。

「ぐはっ！！」

「なぁ、何するんだよ。結衣！」

「いや、刺激的なことを……」

見てしまった。京子姉の……クラゲのパンツ……

「た、大変だよ。恵ちゃんが鼻血を出してまま、気絶しちゃってる」

「お兄……お姉ちゃんにはちょっと刺激的だったかもしれないね。」

何とか意識を取り戻した私。うん、さっきみたのは忘れよう。というか結衣姉。いくらなんでもそれは……ダメだろ。

「うぅ、結衣の馬鹿」

京子姉も顔を真赤にしていた。さすがにあれは誰だって恥ずかしいよな。

「ねぇ、あかりちゃん。私もあかりちゃんのぱ……」

「そこ、とんでもないことを言い出さない」

「えっ？何？」

彩は彩でとんでもないことを言い出そうとしてるし、本当に困った妹だ。

そんな感じに刺激的な話を終えようとしていると……そこに新たな来訪者がやってきた。

「……し、失礼します！入部希望なんですけど……」

やってきたのは京子姉が大好きなアニメの魔法少女ミラクるんにそっくりな見た目の女の子だった。まさかさっき思ったことが現実になるとは……またあかりが……薄くなる

第４話　娯楽部入部！（後書き）

京子「作者！これはどういうことなの？」

六甲水「えっ、何が？」

京子「パンツめくりの件だよ。明らかに私が恥ずかしい思いしてるよね。」

六甲水「いや、やった理由について怒らない？」

京子「理由次第だけど……」

六甲水「ただ単にやってみたかっただけ。それとやらせるなら結衣にめくらせたほうがいいかなって……」

京子「この作者。駄目だ」

第五話　ちなつと不憫なあかりと恋のライバル？（前書き）

お待たせしました。第五話です。今回はちなつちゃんの初登場回とあかりが不憫な目に……

第五話　ちなつと不憫なあかりと恋のライバル？

娯楽部に突然の来訪者がやってきた。名前は吉川ちなつ。私とあかりと同じクラスの子であるが、その容姿はまさに京子姉が大好きなミラクるんそっくりだった。

そんなちなつちゃんが娯楽部を尋ねた理由とは……

「え？茶道部じゃない？」

「そうなの、今茶道部は部員が少なくて廃部中なんだ。」

結衣姉が茶道部の現状についてちなつちゃんに話していた。京子姉はちなつちゃん見て嬉しそうにしてるし……彩と私はのんびりとお茶を飲んでいた。

「あのね、ここは娯楽部で茶道部じゃないけど、あなたはここにいるべきだと思うよ。」

京子姉は物凄く高いテンションでちなつちゃんの手を握っていた。こんなにテンションの高い京子姉は久しぶりに見た気がする。まぁ、あんまりテンション高すぎて、ちなつちゃんが驚いてしまうかもしれない。ちょっと落ち着かせよう。

「落ち着け」

「落ち着いたほうがいいわよ。京子姉。折角来たちなつちゃんが驚いているでしょ、」

「ごめんな。こいつ興奮してるけど、気にしないで」

「は、はい。」

結衣姉と一緒に京子姉を落ち着かせること数分後、やっと落ち着いた京子姉。するとちなつちゃんは……

「あの、私が入りたいのはやっぱり茶道部で、それ以外はあんまり……」

まぁ、確かに茶道部があると思って、扉を開けてみたら非公式の部活の部室となってるし……彼女の言い分が正しいかもしれない。だけど、それでも京子姉は諦めてなかった。

「それなら心肺ゴム用！」

「変換がおかしくなってるぞ」

結衣姉のクールな突っ込みを無視して、京子姉はさらにちなつちゃんを説得し続けた。

「入部希望者が集まれば、茶道部も復活するし、それまでここにいてもいいし、それにお茶の道具とかもあるから練習とかもできるし、」

「はぁ、確かにそうですけど……」

う～ん、あともう少しで説得できそうだけど、ここは助け舟を出しておくか。

「ちなつちゃん。私達が茶道部に入ればいいんだよ。」

「って、娯楽部をやめさせる気か！」

京子姉はちょっと怒りながら言ってきたけど、結衣姉が助け舟を出してくれた。

「なるほど、掛け持ちか。」

「結衣姉の言うとおり、ちなつちゃんは茶道部と娯楽部の掛け持ちを、私たちは娯楽部と茶道部の掛け持ちを……ほら、こうすれば両方廃部にならずに済むんだよ。」

「おぉ、恵と結衣は頭がいいな。」

京子姉は嬉しそうな顔をしていた。まぁ、これも京子姉のためだもん。

「そ、それじゃあ、私娯楽部に入ります。」

こうして新たな部員＋新たな部活を始めることとなった私と彩と京子姉と結衣姉の五人だった。ん？あれ？誰か一人忘れているような……まぁ、気のせいか

次の日の放課後

「それじゃあ、ちなつちゃん。部活行きましょうか」

「うん、そうだね。恵ちゃん。」

「今度、お茶の入れ方とか作法とか教えてね」

「いいよ。きっと恵ちゃんなら直ぐに覚えられると思うから」

私達三人は教室からそのまま部室に向かうこととなった。ってあれ？三人？何かがおかしい気がする。この場にいるのは私とちなつちゃんの二人しかいないはずなのに……もしかして……

「作者さんのミスかしら？」

「何の話？」

何故かそんなことを呟いてしまった私、ちなつちゃんはそれを聞いて不思議そうな顔をしていたけど……

「なんでもないわよ。早く行きましょうか」

「そうだね。」

再び部室へ行こうとすると後ろから私達三人を呼ぶ声が聞こえた。というかまた三人って作者さんはちゃんと文章チェックしているのかしら？

「おに、じゃなかった。お姉ちゃん！ちなつちゃん！あかりちゃん！今から部室に行くの？一緒に行こうよ」

「「えっ？」」

彩が『お兄ちゃん』といい間違えそうになったことに関して怒ろうと思ったが、私とちなつちゃんがそのあとに言った言葉を聞いて驚いた。なぜならそれは……

「「あかりちゃん。いたの？」」

「いたよ！ずっといたからね。今回の話が始まる時からずっと……」

そういえば、始まった時から感じていた違和感。そういえば、前回からの続きのはずなのに今回の始まりからあかりの姿が無かった気がしていた。

「二人とも酷いよ。昨日は普通にちなつちゃんとお話ししてたのに……」

「ご、ごめんね。あかりちゃん。」

「私も、まさかあかりちゃんの影が薄いのがここまでとは思っていなかったから……」

「やっぱりあかり影が薄いんだ！」

落ち込むあかり。まぁ、確かに影が薄すぎて気が付くのに凄く時間がかかった。すると落ち込むあかりを見て彩は……

「お姉ちゃんもちなつちゃんもひどいよ。こんなに可愛いあかりちゃんの存在に気が付かないなんて……」

「「ご、ごめんなさい」」

部室にたどり着いた私たち、部室に入ってみると京子姉はいつも通りのんびりしているけど、結衣姉は誰かの答案用紙を見て驚いていた。

「うわっ、京子。また学年一位かよ。」

「まぁ、一夜漬けしたからね～」

どうやら京子姉の答案用紙だった。するとさっきまで落ち込んでいたあかりが……

「京子ちゃん。結衣ちゃん。聞いて、今日から私は凄くめ……」

「歳納京子ーッ」

あかりが何かを宣言しようとした瞬間、それを遮った二人の少女が現れた。一人は赤髪のポニーテールの少女杉浦綾乃とショートの白い髪にメガネをかけた池田千歳だった。それは私にとって最大のライバルの登場だった。

「あ、あかりの宣言は？」

「それは……後書きか。番外編で…」

第五話　ちなつと不憫なあかりと恋のライバル？（後書き）

あかり「ひどいよ。作者さん。あかりがいなかったことにして……」

いや、だって、影が薄かったから……

彩「こんなに可愛らしいあかりちゃんが影が薄いなんて……ありえないわよ」

それじゃあ、今度番外編であかりの主役回でもやるよ。折角だから彩とのデートを……

あかり「デート？あぁ、ちなつちゃんが言ってたよね。友達なら普通するって……」

彩「も、もしかして、の、ノクターンで夜のデートを……ごくり」

いや、普通に年齢制限なしのやつでだけど……やるか。

あかり「えっ？ノクターン？夜のデート？」

第六話　ライバル視？ライバル！（前書き）

お待たせしました。第六話です。今回はあの二人の登場です。

第六話　ライバル視？ライバル！

あかりが何かを宣言しようとした数分前のこと、七森中の生徒会室ではポニーテールの女の子が一枚の紙を見つめながらおでこを掻いていた。

「……」

ポニーテールの少女、杉浦綾乃を心配そうに見つめているのはメガネをかけた女の子。池田千歳。

「……考え事？」

「わからないわ。」

綾乃がそう言いながら千歳に顔を向ける。そんな綾乃のおでこからは血が出ていた。

「綾乃ちゃん。血出とるよ。」

「どうして私、いつも二番なのよ。また負けたのよ！あんな奴に！」

そして時が戻り、茶道部室に突然乱入してきた二人の先輩？私と彩とちなつちゃんは少し戸惑った。あかりには……

「あ、あかりの台詞が奪われた……」

部屋の隅の方で膝を抱えて泣いていた。折角主役回だと思ったのに……また出番が削られるのか。あかり……

「あれ？綾乃？どうしたの部室まで来て、」

京子姉はそんなあかりを気にせずに、突然の乱入者と話していた。

「あなたね。どうしていつもテストで一位を取ったりするし、それにこの部室だって無断使用して……」

まぁ、確かに部室の無断使用ってダメだと思うけど……とりあえずあの事でも話しておくか。

「あの、ちょっといいですか？」

「何よ！って、えっと貴方は……」

「あぁ、自己紹介が遅れました。私、折山恵っていいます。」

「あっ、わざわざ、ありがとう。私は杉浦綾乃よ。この七森中の副会長よ。」

「私は池田千歳っていいますぅ～、よろしゅうなぁ～」

「それで折山さん。何かしら？」

「はい、実は杉浦先輩にお話があるのですが、この部室なんですけど、私達別に無断使用はしていません。」

「どういうこと？」

私の言葉を聞いて、？マークを浮かべる。ちなつちゃんや彩も、さっきまで泣いていたあかりも、さらには結衣姉も何のことだかわかっていなかった。とりあえず私は鞄から一枚のプリントを杉浦先輩に渡した。

「部活動における部室の申請書なんですけどね。ちょっと見てもらっていいですか？」

「えっ、どれどれ～って何よこれ！」

「どうしたん？」

池田先輩も渡した紙を見ると……

「茶道部室の使用許可書やな。何々……『茶道室の使用許可書、娯楽部と茶道部』」

「えぇ、私たちは娯楽部と茶道部を一緒にやっているんですよ。それで部室の使用許可書を渡そうと思ったんですけど、生徒会室とか場所がわからなくって、出すのが遅れて申し訳ありません。」

私は笑顔で言うと、杉浦先輩は肩を震わせていた。結衣姉たちはというと……

「恵。お前、よくこんなの作ったな。」

「恵ちゃん凄いです。」

「恵ちゃんって昔からこういうのを書くのが好きだったよね。」

結衣姉、ちなつちゃん、あかりの順番に私のことを褒めてきた。彩はというと……

「というか、あの紙って生徒会室でもらうんじゃ……」

「ダメよ。彩。そんなこと言ったら、」

余計なことを言われる前に注意をする私。まぁ、本当に生徒会室の場所が分からなかったから職員室に行って場所を聞いたときに生徒会長の人から貰ったんだけどね。

「うぅ、いくらこれが受理したからって私は許さないわ。というか歳納京子は去年から無断使用しているのよ。その紙が受理されるのは今年から、去年からの問題については関係ないわ。部室の無断使

用は罰金バッキンガムよ」

それにしても、杉浦先輩ってどうしてこんなに娯楽部に対して厳しんだろう？問題って言っても部室の無断使用だし、タバコとか吸っているわけじゃないんだから……そんなことを考えているといつの間にか隣にいた池田先輩が言ってきた。

「折山さん。どうして綾乃ちゃんがあんなに厳しいかって気になっとるみたいやな。実は綾乃ちゃん。歳納さんの事好きなんよ。でも、ほら、綾乃ちゃんの性格上素直になれなくってあんな風にツンツンしちゃうんよ」

なるほど、杉浦先輩はいわゆるツンデレというものか。それにしても……まさかこんな所にライバルが……これは気合を入れないと……

そんなこんなで色々と気になっていたせいで、全く話を聞いていなかったけど、杉浦先輩と京子姉は今度のテストで勝負することとなっていた。

そして帰り道

結衣ＳＩＤＥ

（何だか気合を入れている恵。千歳とさっき話していたみたいだけど……一体何の話なんだ？）

私はそう思いながら恵を見つめた。

ちなつＳＩＤＥ

（結衣先輩、さっきから恵ちゃんを見てるけど……も、もしかして結衣先輩、恵ちゃんのことが……そんな、それだったら私が結衣先輩を振り向かせてみせる。）

私はそう思いながら新たな決意をするのであった。

あかりＳＩＤＥ

（あかり、また出番がなかったなぁ～、ゆるゆりの主役なのに……）

「ね、ねぇ、あかりちゃん。」

「ん？何？彩ちゃん。」

「こ、今度、デ、じゃなかった。一緒に遊びに行かない？」

「いいよ。それじゃあ、今度の日曜日に……」

「う、うん。」

これってもしかしてあかりの主役回？これならあかりも十分目立つ

はず……

彩ＳＩＤＥ

（あ、あかりちゃんとデート。こ、これをきっかけにあかりちゃんと……ピーしたり、ガーしちゃったり、最終的にはキスをして……ピーして、ガーして、ズドドドドしちゃったり……）

そんなこんなで勘違いをしたり、色々と気になったり、危ないことをしようとしたりと複雑な事情が絡み合った帰り道であったのだった。

第六話　ライバル視？ライバル！（後書き）

テスト話は少し話が進んでからまたやります。次回はまだ出ていない櫻子と向日葵をだそうと思ったのですが、なんとなく番外編であかり×彩のデート回をやりたいと思います。

番外編　彩とあかりのデート！？（前書き）

きょ～こ～

京子「はぁーい、ゆるっと恋。はっじまるよぉ～って、このタイトルコールは……」

恵「何？なんか私と結衣姉も呼ばれたんだけど、」

結衣「まさか……出番がないのか？」

いや、ちょこっとあるけど、あまり出ないということなので……今回は彩ちゃんとあかりの主役回だから……

京子「ふぅ、それなら、別にいいや。ちょこっと出るぐらいなら……」

ちなつ「あの、私は？」

……では、番外編始まります。

ちなつ「って、私はーーー」

番外編　彩とあかりのデート！？

今日この日、私は生まれてからこの１２年間の中で運命の日になるのではないのかと思う。その理由は……

「あっ、彩ちゃん。お待たせ。少し待たせちゃったかな？」

「ううん、私もさっき来たところだから、」

そう今日は待ちに待ったあかりちゃんとのデートだ！そして今日、私はあかりちゃんと……恋人同士になるのだ。

「彩ちゃん。お洋服可愛いね。」

あかりちゃんは笑顔で私の着ている洋服を褒めてくれた。だって、今着ている服は私が頑張ってお金を貯めて買ったお気に入りの物なんだもん。で、でも、あかりちゃんが着ている服もすごく可愛い。

「あかりちゃんも今日着てる服とっても可愛いよ。」

「わぁ、ありがとうね。彩ちゃん。」

褒められて喜ぶあかりちゃん。やばい。凄く可愛い。どうしてお兄ちゃんはこんなに可愛いあかりちゃんじゃなくって、京子お姉ちゃんに惚れちゃったんだろう。まぁ、惚れたら惚れたで全力お兄ちゃんの恋を邪魔して……あかりちゃんと私が結ばれるようにするんだから……

「うぅ！？」

「どうしたの？恵？」

「風邪か？」

京子宅で京子の同人誌の手伝いをしている俺だったが、何故か突然寒気が襲ってきた。なんだ？誰かに恨まれるようなことでもしたのか？

「い、いや、なんでもないけど」

「そっか、じゃあ、こっちのページにベタよろしく」

「あ、うん。」

とりあえず、気のせいであって欲しい。

とりあえず、私たちは待ち合わせ場所からそう離れていない喫茶店に入った。あかりちゃんは美味しそうにジュースを飲んでいる。

（あぁ、あかりちゃんのジュースを飲んでる姿……可愛い。）

「どうしたの？彩ちゃん。さっきから明かりの方じっと見てて……」

「だって、あかりちゃん可愛いんだもん」

「ふぇ、そ、そうかな？あかりってそんなに可愛くは……」

「ううん、あかりちゃんは本当に可愛いよ。本当かどうか今から確かめに行こう。」

私はあかりちゃんの手を握りしめ、そのままホテルに行って……ピーして、ピーなことを……

「あ、彩ちゃん？どうしたの？さっきからにやにやしてるけど」

「な、何でもないよ。」

マズイ、つい妄想をしてしまった。あかりちゃんが心配そうにしてるけど……とりあえず心の声が聞こえてないだけマシだ。

「でも、彩ちゃんとこうしてどこかに遊びに行くのは久し振りだね。」

「そうだね。というか二人っきりっていうのが初めてだよね。」

「そういえば、そうだよね。いつも京子ちゃん達と一緒に遊んでたりしたから……今度はちなつちゃんや恵ちゃんも誘って一緒に遊ぼう。」

「う、うん。そうだね。」

今度はみんなで……そんなことしたらデートじゃなくなる。よし、その時が来たらお兄ちゃんを縛ってこられないように……

「うぅ、まただ。」

また寒気を感じる。一体今日は何なんだ？こんなに寒気を感じるなんて……風邪でも引いたのか？

「恵。手が止まってる。今日中に現行を終わらせないと……」

「というか、いつも思うが、何で今回はこんなにギリギリなんだ？」

「え、えっと、ネタだしというゲームを……」

それから私たちはいろんな場所を見て回った。いろんな場所を回ってあかりちゃんはいつもニコニコしていた。駄目だ。体力はまだあるけど、心が辛い。こんなに無邪気なあかりちゃんを見ると……

（こ、興奮して鼻血が出てしまう。）

そんなことを思っていると、いつの間にか私の家の前に来ていた。そうか、もうデートも終わりか。

「ありがとうね。彩ちゃん。あかり、凄く楽しかったよ。」

「そ、そっか、あかりちゃんが喜んでくれて私も嬉しいよ。」

「うん、また一緒に遊ぼうね。」

あかりちゃんは笑顔でそう言う。よし、ここで私はあの事を聞こう。学校では人がいるから聞けないけど、今なら聞けるはずだ。

「ね、ねぇ、あかりちゃん。」

「ん？なぁに？」

「あかりちゃんは私のことどう思ってる？」

思い切って聞いてみた。するとあかりちゃんは直ぐに答えてくれた。その答えは……

「あかりは彩ちゃんのこと好きだよ。」

「ほ、本当？大好きってくらい？」

「うん、大好きだよ。だって、彩ちゃんはあかりの大切な……」

こ、これはきっと『あかりの大切な恋人だもん』っていうはずだ。そうに違いない。私はそんなことを思っていると、

「友達だもん。」

「そ、そっか、私もあかりちゃんの事好きだよ」

まだあかりちゃんは私のことを友達として好きだっていう感じだけど、これから先、きっとあかりちゃんと恋人同士になるために……

……がんばろう。

あかりちゃんと家の前で別れ、私は直ぐに家に入り、自室に入るとあるアルバムを開いた。

「はぁ、はぁ、あ、あかりちゃん。可愛い。」

私は同じ同志であり、ライバルでもあるあかりちゃんのお姉ちゃんから貰ったアルバムを見て、今日のデートを思い出すのであった。

番外編　彩とあかりのデート！？（後書き）

ちなつ「……私、名前だけ……」

ごめん。実は次回は向日葵と櫻子の話だから……ちなつちゃんの出番は少ないよ。

ちなつ「というか、私のメイン回は？」

いや、考えてない。とりあえず、考えてるのはノクターンで書くあかりと彩のものと、短編でじっくり書いてるロウきゅーぶ！しか考えてないから……

ちなつ「うわぁーーーん、結衣せんぱーーーい。私の出番がーーーーーー」

第7話　向日葵と櫻子（前書き）

お待たせしました。今回は向日葵と櫻子の話です。

第7話　向日葵と櫻子

生徒会室で綾乃はとあるプリントを見ていた。そのプリオンとを見て綾乃は……

「あっ、こないだのプリント。歳納京子だけ提出してない。これは私自ら取りに行かないとね。」

綾乃はそう言いながら嬉しそうであった。そんな綾乃を見て、千歳は……

「まったまた綾乃ちゃんは、歳納さんと喋りたいだけやろ。」

「な、何言ってるのよ。そんなことあるわけ無いじゃない。ほ、ほら、千歳、早く行くわよ。」

「なんや、うちも？でも、書類整理が……そや、」

千歳はたまりに溜まっていた書類の山を見て、ある事を思いつくのであった。それは……

「えっ、書類整理ですか？」

「そや、うちらがおらん間だけ、書類整理代わってもらえんかなって」

「お安い御用です。まっかせてください。」

明るい茶髪の少女、大室櫻子と

「先輩方のためでしたら喜んでお受けいたしますわ。」

緑髪の長い髪を三つ編みにまとめている少女、古谷向日葵。この二人は生徒会のメンバーであり、恵たちと同じクラスでもある。

「二人ともありがとうなぁ～あとでジュースおごったるわ～」

「わ～い」

櫻子は嬉しそうに言う。書類整理を二人に任せた綾乃と千歳は生徒会室を後にすると……向日葵と櫻子の二人は睨み合った。

「負けませんわよ。次期生徒会の副会長になるのは子の私ですわ。」

「わ、私だって、負けないんだから」

「あら、櫻子に出来るかしら？」

「ふん、向日葵だって、そのおっぱいが邪魔して書類整理だってままならないはず。」

「確かに向日葵ちゃんのおっぱいってデカイよね。」

「「えっ？」」

向日葵と櫻子の喧嘩の最中に何故か二人しかいないはずの生徒会室からもう一人の声が聞こえた。二人は辺りを見渡すと……ドアの前にプリントを持った彩がいた。

「あ、貴方は確か……折山さんの妹の……」

「彩だよ。プリント提出し忘れたから生徒会室まで来たんだけど……」

「あら、そうでしたの。じゃあ、預かりますわ。」

向日葵が彩から書類を受け取ると、彩は山積みにされている書類を見た。

「何か大変そうだね。手伝おうか?」

「あら、ありがたいですわ。どうも私と櫻子だけだと絶対に片付けられないので、」

「向日葵が遊んじゃうもんね。」

「それは櫻子の方でしょ、」

再び二人が口喧嘩を始めると、彩はとある事を言い出した。

「じゃあ、お姉ちゃんたちも呼ぼうか?それだったらこれ、直ぐに片付けられると思うけど……」

彩から電話を受けて、生徒会室に来てると机の上に山のような書類があった。

「スゴイ量ですね。」

「恵さんたちも手伝いに来てくれてありがとうですわ。」

「あかりは大丈夫だよ～」

「友達の頼みだもんね」

「さぁ、早く片付けちゃいましょ」

向日葵がそう言うと、あかり、ちなつちゃん、私が順番に言った。

「先輩方まで部活中でしたのに、」

「あぁいいよ。」

櫻子ちゃんと結衣姉がそんなことを言っている中、京子姉と彩は……

「凄いよ。冷蔵庫ある」

「本当だ。それにプリンもある。」

二人が生徒会室にあるものを興味津々に見ていた。

「二人とも、手伝いに来てるんだから……」

私がそう言うと、京子姉と彩がプリンを持ってきた。

「さぁ、ぱっぱとやっちゃおう～」

「そうだね。プリンもあるし」

プリンの蓋には『あやの』書かれていた気がするけど、それって綾乃先輩のじゃ……

とりあえず黙々と作業を行っている中、ふっとまた櫻子ちゃんと向日葵ちゃんが喧嘩をしていた。何でいつも喧嘩しているのかあかりとちなつちゃんに話を聞いてみた。

「ねぇ、あかり、ちなつちゃん。どうしてあの二人って仲悪いの？」

「ん、二人は次期副会長希望のライバル同士なんだよ～」

「いつも喧嘩してるよね。それに幼稚園からの腐れ縁なんだって」

「へぇ、そうなんだ。」

そんな話をしていると彩が突然不敵な笑みを浮かべた。

「どうしたの？彩？いきなり変な笑いして……」

「お姉ちゃん。世の中にはあの二人にぴったりの言葉があるって知ってる？」

「「えっ？」」

彩の言葉を聞いて、作業の手を止める向日葵ちゃんと櫻子ちゃん。

「どういう言葉なの？彩ちゃん。」

「あかりちゃん。その言葉はね。『喧嘩するほど仲がいい』って言葉が……」

「「違う（ますわ）！！」」

彩が言いかけた瞬間、同時に否定する二人。確かにちょっと仲がよさそう。

「とりあえず、一年組、手が止まってるよ。」

みんなでそんな話をしていると、結衣姉が注意してきた。そういえばまだ作業中だった。

「あっ、そうだ。これ昨日提出し忘れてたんだけど、渡しといて～」

京子姉が一枚のプリントを向日葵ちゃんに渡していた。確かそのプリントって彩も出し忘れてたような……

そんなこんなで書類整理を終わらせることが出来、みんなで部室へ戻ろうとした時、彩がいないことに気が付き、探しに行ってみると……

「おぉ、二人は抱きあう仲だったんだ～」

「「ちょ、何写真取ってるのよ（ですわ）」」

何故かカメラを持ってはしゃいでいる彩とその彩を追いかける向日葵ちゃんと櫻子ちゃん。何があったんだろう？まぁ、関わらないほうがいいよね。

第7話　向日葵と櫻子（後書き）

とりあえず、何か短めになった気がしますが、次回は結衣の家にお泊りと行く前に、生徒会長と恵の話をやります。

第八話　生徒会長と結衣の家（前書き）

どうもお待たせしました。第八話です。今回は生徒会長と恵の話から始めます。結衣の家に行くのは最後辺りで……

第八話　生徒会長と結衣の家

とある日のこと、私が生徒会室へ何故か京子姉に頼まれたプリントを提出にし来ていた。

「それにしても、京子姉、自分で行けばいいのに……」

そう呟きながら生徒会室に入ると、中には杉浦先輩たちはいなく、一番奥の椅子に座っている黒髪の女の子しかいなかった。

「あっ、失礼します。生徒会長。」

「……」

生徒会長である松本りせ先輩。物凄く小声であまり聴き取れない人がいないらしいけど、私や西垣先生は何故か聞き取れる。

「ちょっと友達に頼まれて、代わりにプリント提出しに来ました。」

「……」

「まぁ、確かに普通は自分で届けるものですよね。」

私は苦笑いしながら、プリントを松本先輩に渡すと、先輩は……

「……」

「えっ？バレていないかって？まぁ、今のところは大丈夫ですよ」

そう、京子姉たち幼なじみメンバー以外に私の事情について知っているのは一部の先生と、この生徒会長の松本先輩だけなので、松本先輩は私の学校生活を心配してくれていた

「……」

「何か大変なこととかあるかって？まぁ、体育の時に着替えとかは結構大変かな？みんなが出ていくのを待ってからじゃないと上着とか着替えられないから……でも水泳とかだと色々と大変だからね。」

「……」

「へっ？もしも女の子の着替えとか覗く気だったら、先生たちに言うって……いや、それは絶対にないから……というか、先輩。それ、俺的にはあんまり笑えない冗談ですよ」

まぁ、確かにそう言う風に疑われてもしょうがないけど……でも、水泳の授業とかどうしよう？着替えとか色々と気を使うし……スクール水着も色々をバレそうだし……

「……」

「もし良かったら、西垣先生に頼んでバレないような水着とか付け替えが出来る胸とか作ってもらったら？まぁ、そうしてもらえると嬉しいけど、西垣先生の発明品って全部爆発して終わりそうだから怖いんだけど、」

「……」

「多分大丈夫って、先輩って凄く先生のこと信頼してますね。」

私がそう言うと先輩は頬を赤らめていた。結構先輩と先生って仲いいからな……

「……」

「とりあえず、プリント受け取っておく。これからもバレないように気をつけてね。分かりました。先輩。」

「……」

「はい、困ったことがあったら直ぐに言いますよ。」

私はそう言って、生徒会室を出ていくのであった。そういえば、他の人達は何やってるんだろう？

「今の話って……何？」

生徒会室前の廊下の物陰に隠れながらちなつはそんなことを言っていた。

「恵ちゃんが生徒会室に入っていくの見て、つい覗き込んじゃったけど……今の話って……もしかして、恵ちゃんって……」

ちなつはそう呟きながら、廊下を歩く恵の後ろ姿を見つめるのであった。

茶道室に戻って、京子姉にプリントを渡してきたと報告すると、

「おぉ～、ありがとう～。」

「京子。お前、恵に頼まずに自分でいけよ」

「だって、丁度渡しに行こうと思っていたら、恵が通りがかったから……」

「まぁ、あれくらいだったらいつでも頼んでよ。」

私がそうやって笑顔で言うと、結衣姉がため息をついていた。

「はぁ、恵って京子には甘いよな。」

「そうかな？」

「みんなただいま～、」

そんなことを話しているとトイレに行っていたあかり、彩、ちなつちゃんの三人が戻ってきた。そしていつも通りにダラダラと過ごすはずが……

「あっ、そういえば、」

本を読んでいた結衣姉が突然そんなことを言い出した。どうしたんだろう？

「私、一人暮らし始めました」

「「「「「えぇーーーーーーーーーーーーーー！！」」」」」

第八話　生徒会長と結衣の家（後書き）

短めですみません。次回は結衣の家へ行く話と、ちなつちゃんにバレる話をやります。

第九話　結衣の家に行こう！（前書き）

更新遅れてすみません。やっと上げられました。今回は結衣の家に行く話です。さらにちなつちゃんに恵の事がバレます。

第九話　結衣の家に行こう！

結衣姉の突然の一人暮らし始めた宣言。私たちは結衣姉に理由を聞くとどうやら人生経験のために始めたらしい。そこで京子姉の提案で今度の日曜日に結衣姉の家に遊びに行くことに……

そして日曜日、彩は用事があるらしく私、あかり、京子姉、ちなつちゃんの四人で結衣姉の家を尋ねるのであった。そんな中ちなつちゃんが……

「ねぇ、恵ちゃん。」

「何？ちなつちゃん？」

何だかちなつちゃんもじもじしてるけど、どうしたんだろう？

「えっとね。ちょっと確認したいことがあるけど、恵ちゃんって結衣先輩の事どう思ってる？」

「どうって……幼なじみだし、何というか結衣姉ってお姉ちゃんみたいな感じがするかな？」

「じゃあ、付き合いたいとか思ってないの？」

「あ、うん。思ってないけど……」

一体どうしたんだろう？今日のちなつちゃん？何だか様子がおかしいし……

「確認したいことって、それだけ？」

「あ、あともう一つ、この間……」

「おーい、二人とも早く結衣の家入ろうぜ～」

ちなつちゃんが何か言いかけた瞬間、京子姉の呼ぶ声が遮った。

「今行く～。それでちなつちゃん、この間どうしたの？」

「あ、ううん、後で話すよ。」

ちなつちゃんは笑顔でそう言ったけど一体どうしたんだろう？

みんなで結衣姉の家に入ると、結衣姉の家は凄く広い部屋でパソコンもあったり、日当たりもよくって……・

「枕持ってきていい？」

「住むな！」

と京子姉のテンションが高くなってた。

その後、みんなで一緒にゲームをやってたりしているとちなつちゃんがある物を発見した。

「これって、アルバム！見てもいいですか？」

「あー、小さい頃の……」

とちなつちゃんが嬉しそうに言ってた。あれ？何か忘れてるような……そう思い私はあかりの方を見た。

「どうしたの？恵ちゃん？」

「うん、あかりは忘れてないね。」

「意味が分からないけど、何だかあかりまた影が薄くなってた？」

「気のせいだよ。」

とりあえず、みんなでアルバムを見ることにした。小さい頃の結衣姉は今より髪が長くって凄く女の子らしかったっけ。ちなつちゃんも小さい頃の写真を見て……

「わー、結衣先輩可愛い」

「そ、そう？ありがとう」

ちなつちゃんにほめられてか、少し顔を赤らめてる結衣姉。結構珍しいかも。すると京子姉は一枚の写真を見て……

「本当に懐かしいな。この頃は……」

『きょうこ、きて』

『なあに？結衣ちゃん？』

『私ね。ずっと……こんなことしてみたかったの』

『だ、ダメだよ。結衣ちゃ……あ』

『大丈夫……こわくないよ。天井のシミ数え終わる頃には終わってるから……』

「って、言うことが」

「いや、無いから！明らかに合った風な妄想をするな！」

京子姉の妄想にツッコミを入れる結衣姉。まぁ、確かにそんな事あったりしないからね。小さい頃は……

「あれ？」

するとちなつちゃんが一枚の写真をじっと見ていた。何か写ってたのかな？

「あの、京子先輩。この京子先輩におんぶされてる男の子って誰ですか？」

「ん、どれどれ？あぁ、これ。これは……」

京子姉が言いかけた瞬間、さっき忘れていたことを思い出した。小さい頃の写真って……俺が写ってる！

「待った、きょうこ……」

「これは恵だよ」

止めに入ろうと思ったけど、時既に遅し、京子姉が言っちゃった。
結衣姉も今になって気がついた。あかりに至っては何がなんだか分からずにいた。

「やっぱり、恵ちゃんって男の子なんだ。」

ちなつちゃんが冷たい目でこっちを見てきた。

「えっと、その……」

「あー、えっと、ちなつちゃん。これには訳が……」

「結衣先輩たちは少し黙っててください。恵ちゃん、理由聞かせてくれるよね？」

結衣姉の助け舟が封じられ、じっと睨まれている私……とりあえずちなつちゃんに理由話しておこう。

理由を話して十分後

「という訳で、家の事情で女装をする目に……別にやましい気持ちがあるとかじゃないから……」

「うん、分かったよ。私も恵ちゃんが生徒会室で話してたの聞いて、ずっと気になってたんだけど……まさか家の事情でそんな目に……（本当は結衣先輩が好きだからって理由で女装してるかと思った）」

「とりあえず、この事は他の人には黙ってて、」

私がちなつちゃんに一生懸命お願いするとちなつちゃんは笑顔で答えてくれた。

「分かってる。そんな事情じゃしょうがないし、それに私たち友達だもんね。」

「ありがとうね。ちなつちゃん。」

私はちなつちゃんと握手を交わすと、あかりが……

「よかったね。恵ちゃん。」

「うん、ちなつちゃんともっと仲良く慣れた気がするよ。」

「いやー、良かった。良かった。これも私のおかげだな。」

京子姉が正座しながらそんな事を言っていた。ちなみに何故正座しているかというとうっかり女装のことばらしたので、結衣姉の折檻

だった。

「全く、ちなつちゃんがわかってくれなかったらどうしてたんだ。」

「大丈夫。ちなつちゃんはわかってくれる子だから。」

「こいつは……」

結衣姉がちょっと怒りそうになってたけど、とりあえず丸く収まって良かったよ。

「そういえば、あかりちゃん？」

「何？ちなつちゃん？」

「恵ちゃんってもしかして、京子先輩のこと」

「うん、小さい頃から大好きだって、結衣ちゃんが言ってたよ。」

「やっぱり」

第九話　結衣の家に行こう！（後書き）

とりあえず次回は……何の話しをやるか決まってません。とりあえず原作二巻のどれかの話をやりたいと思います。

第十話　お願いごと（前書き）

何を書くか悩んでいましたが、とりあえず七夕の話を書きます。

第十話　お願いごと

7月のある日、娯楽部の皆で下校している時のこと……

「最近暑いね～」

「うぅ、早くシャワー浴びたい……」

あかりと京子姉がそんな事を言っていると、ちなつちゃんが……

「そういえば、恵ちゃんは髪縛ったりしないの？いつも下ろしたまま
だから見てて暑い感じがしてくるよ」

「ん？私はあまり暑いって感じないし……まぁ、正直な話。スカ
ートはいてる時点でちょっと涼しいって感じてるから……」

「そういえば、男の子だったんだっけ。あまりにも女の子ぽいから
その設定忘れちゃうよ」

ちなつちゃんがそんな事を言っていたけど、お願いだから男の子だ
っていうこと忘れないでほしい。私もたまに忘れることがあるんだ
から……

「おっ、短冊だ」

結衣姉がふっと短冊を見つけた。そういえばそろそろそういう季節
だっけ……

「わぁ、お願いごとたくさん書いてあるよ」

「本当だ。『家族がずっと健康でいられますように』『平和でありますように』」

「こういうの見ていると心が温まりますね」

結衣姉とちなつちゃんが短冊を見ていると京子姉もあるものを発見した。

「見てみて、恋愛の願い事も書いてあるよ」

みんなで恋愛関係が書かれているものを見ることになった。

『今年こそ彼氏ゲット』

『告白がうまくいきますように』

「結構いっぱい書いてるんだね」

「そうだね～」

あかりと一緒に見ているとちなつちゃんがある願い事が書かれている短冊を見つけた。

『りかちゃんとうわあああああああああ■■■ますように……けんた』

（（（いったい何が……））））

なんだか見ちゃいけないものを見てしまった気がした。

「あれ？杉浦先輩と池田先輩の奴もある」

ふっと見つけた先輩方の短冊を見つけた私、すると京子姉が隣に来て短冊を覗き込んできた。

「へぇ、どれどれ『もう少し仲良くなれますように』『豊作祈願』綾乃誰と仲良くなりたいんだろ？」

（それ、多分京子姉なんじゃ……というか京子姉顔が近いよ）

あまりにも顔が近くってちょっと恥ずかしくなってきた。

「あれ？恵ちゃん顔真っ赤だけどどうしたの？」

あかりちゃんがそう言うと彩が……

「大丈夫だよ。あかりちゃん。あれはお姉ちゃん特有のものだから」

「へぇ、そうなんだ～」

いや、何の理由にもなってないし、それで納得しないであかりちゃん。

とりあえず皆で短冊にお願いすることとなった。それにしてもお願い事か……

（やっぱりここは普通にいいことありますようにって書いたほうがいいかな？）

そんな事を考えていると、ちなつちゃんが最初に書き上げたみたいだった。

「出来ました～」

「へぇ、どれどれ」

結衣姉が短冊に書かれた願い事を見た。私も一緒に見ると……

『ゆい先ぱいと？キス？できますように』

（何というか、ちなつちゃんらしい）

心のなかでそう思う私であった。

「京子姉はなんて書いたの？」

「ん」

京子姉に短冊を見せてもらうとそこには……

『シャワー浴びたい』

「お願いするようなことなの？」

「することだもん」

そこまでシャワー浴びたいんだ京子姉……

「彩はなんて……まぁ、大体予想つくけど」

「うわ、何その私が単純だから願い事なんて直ぐわかるよって言い方……」

「じゃあ、なんて書いたの？」

「はい」

彩が書いたものを読むとそれは……

『お姉ちゃんの恋が成就しますように』

「結衣姉、ライター持ってない？それかマッチでもいいんだけど」

「お姉ちゃん酷いよ！折角お姉ちゃんのこと思って書いたのに……」

それから数分、彩と取っ組み合いをし、何とか願い事を変えてもらうことにした。

結衣姉の願い事を見ると普通に『みんなでずっと楽しくやっていきますように』って書いたみたいだったけど、ちなつちゃんなんだかポワ～ってしてるけどどうしたんだろう？

「そういえば、あかりちゃんはなんてお願いごとしたの？」

「えっ、そ、それは……」

「聞いてやるな。恵」

願い事を聞こうとすると結衣姉が止めてきた。

「あかりの願いは切実なんだから……」

「はぁ、一応聞かないことにするよ」

あかりのお願いごとについて少し気になったけど、とりあえず、みんなで短冊を笹に結ぶのであった。ちなみに私のは見えないように隠すのであった。

京子ＳＩＤＥ

みんなで短冊を書いたその夜、ちょっとコンビニに出かけた帰りに短冊が置いてあった場所を通った私は……

「そういえば、恵のやつなんて書いたんだろ？アイツ、奥のほうに結んだから……」

私は恵の短冊を探して、私は見つけた。

「ふふ、誰にも見られないようにしてたみたいだけど、甘い。この私の前で隠し事なんて……えっ」

私は恵が書いた短冊を見るとそこに書いてあったのは……

『京子姉ともっと仲良くなれますように……』

「……」

番外編　お正月（前書き）

今日は元旦ですね。

恵「そうですね」

なので本編ではなく番外編をあげようと思います

恵「何でまた、」

やりたいから

恵「そうだと思ってましたけど」

番外編　お正月

お正月、娯楽部の皆はそれぞれ色んな過ごし方をしていた。

あかりの場合

「あけましておめでとうございます」

晴れ着を着て、礼儀正しく親戚の人達に挨拶をするあかり。

「おめでとう。あかりちゃんは本当にいい子ねぇ。これもらって」

「わざ、ありがとうございます」

親戚の皆からお年玉をもらってすごくうれしそうにしているあかり。

その後、皆から届いた年賀状を見ていると……

「わぁ、皆から来てる……あれ？彩ちゃんの年賀状がない？届いてないのかな？」

あかりに娯楽部メンバーで届いたのは結衣、京子、ちなつ、恵だけしかなく、何故か彩のがなかった。

「明日にでも届くのかな？」

そう思い、ちなつの年賀状を見ると……

「ひっ！！」

ちなつの年賀状に書かれていたのは明らかに辰には見えない何かの絵だった。それを見たあかりは白目を向いたまま固まるのであった。

ちなつの場合

ジャージ姿でのんびり過ごしているちなつ。すると……

「ちなつー、お姉ちゃん出かけるわね」

「え？どこ行くの？」

「赤座さんと初詣に行くの～」

「あかりちゃんのお姉さん？」

「いってきまーす」

「いってらっしゃーい」

姉を見送ると、ちなつは部屋に戻りながらある事を思っていた。

「いいな～初詣……私も結衣先輩と……」

『先輩は何をお願いしたんですか？』

『もちろん、ちなつちゃんとラヴラヴでいられますようにって』

「きゃーーーいやんもう先輩ステキ！」

妄想しながら悶えていると、さらなる妄想をした

（去年はすっごくいい年だったな……先輩と出会えたし、おでこにキスも……今年はもっとアプローチをして……最終的には……）

「やぁ～んもうわたしったらなに考えてるの！」

さらなる妄想をしていると呼び鈴がなった

「誰だろ？お姉ちゃんでも戻ってきたのかな？」

ちなつはそう思いながら、玄関の扉を開けるとそこには恵と彩がいた。

「恵ちゃん。どうしたの？というか彩ちゃんも……」

「新年早々ごめんね。ちなつちゃん。彩が年賀状を出し忘れてて……それを届けに……」

「そんなわざわざ届けなくっても……」

「いや、それが年賀状を出してないことをお父さんにバレて、彩の今年のお年玉はなしにされそうだから……」

「あぁ、こうやって渡しに回ってるんだ。もしかして最初は私？」

「いや、ここに来る前にあかりちゃんの家に行ったら、あかりちゃん……気絶してたから……」

「気絶！？なんでまた！？」

「……まぁ、何かあったんだと思うけど……」

理由は知ってるけど、そのことはちなつちゃんには言えない。だって、元凶だもん

「あと結衣姉は実家に帰ってるみたいだし、今から郵便受けに入れに行こうと思うけど……ちなつちゃんも一緒に行く？」

「結衣先輩、実家に戻ってるんだ。じゃあ、行っても意味が無いし……わざわざ年賀状届けに来てありがとうね」

ちなつちゃんは笑顔でそう言い、私と彩のふたりは京子姉の家に行

こうとすると……

「ところで、恵ちゃん。」

「何？」

「お正月でも女装してるんだね」

ツッコミを入れてきた。今の私の格好は女性物の晴れ着に少しだけメイクをしていた。

「だって、行くんだったらこれ着てけってお父さんが……」

「あぁ、新年早々大変だね」

京子の場合

「あけまして、おめでとうございます。あの、京子姉いますか？」
京子姉の家を尋ねると、京子姉のお母さんが出てきた。
「あら、恵ちゃん。久しぶりね。どうしたの？」
「いえ、かくかくしかじかで年賀状を届けに……って京子姉は？」
「あの子、まだ寝てるわよ。」
京子姉、まさか寝正月を決め込む気か……
「とりあえず年賀状だけ置いておきますので……」
「わざわざありがとうね。そうだ、折角だから上がって行ったら？」
「いやでも、悪いですし……家に戻らない心配されるので……」
「そこは任せてよ。私先に帰ってるから、お父さんにちゃんと伝えておくから」
「何か心配だけど……いちおう任せた。」
彩に任せて、私は家に上がり、京子姉が寝ているところに行くと……
「やっぱ、寝てる……風邪引いてもしらないよ。京子姉」
私がそう言いながら、京子姉を見つめた。

「京子姉、今年もよろしくね」

私はそう呟くと……

「ん？あれ？恵、来てたんだ」

「京子姉、おはよう。こたつで寝てたら風邪引くよ」

「大丈夫だよ。でも、何で家にいるの？」

「年賀状を届けにそしたら、家に上がってくれって言われたから……」

私がそう言うと、京子姉は「ふ～ん」と言っていた。すると京子姉は……

「なぁ、恵。」

「ん？」

「明日辺り娯楽部のみんなで初詣に行こうぜ！結衣も明日には帰るって聞いたし」

「そうだね。そうしよっか」

こうして、娯楽部の元日は終わるのであった。

番外編　お正月（後書き）

何か最後辺りグダグダになった気が……とりあえず番外編はこれで終わりです。明日辺りに本編を上げて、明後日にはまた番外編を上げます。では、みなさん。今年もよろしくお願いします

第十一話　少し進展？（前書き）

今回は本編と番外編同時に更新します。まずは本編から

第十一話　少し進展？

みんなで短冊を書いた次の日の休日。俺は珍しく女装から解放されて、男の姿として外に出ていた。だけど、事情を知らない知り合いに会わないように帽子と伊達眼鏡をかけて変装をしていた。

「はぁ、やっと女装から解放されたのはいいけど、わざわざ変装しないと男の姿で外を歩けないなんて……」

俺はそう呟きながら歩いていると……

「あれ？恵だ」

フッと声をかけられ振り向くとそこには京子姉がいた。京子姉の手には数冊の本が入った袋を持っていた。

「あれ？京子姉？どっか行ってたの？」

「うん、ちょっと同人誌の資料探しを……」

「へぇ、そういえば今度のコミケにも出るんだっけ？」

「そうだよ。みんなに読んでもらえるように頑張んなきゃ」

京子姉は嬉しそうに言った。俺もたまに手伝ったりするけど……結構面白かったりする。

「それにしても、さすがに後二件回るのも疲れる……」

「だったら京子姉、荷物持とうか？」

「いいの？」

「それぐらいなら手伝えるし……」

「ありがとうな。恵」

そう言いながら京子姉は俺に荷物を手渡そうとした時、少し手が触れ合った気がして少しドキドキした。

「それじゃあ、どこ行こっか？」

「えっ、あ、うん。」

何故か京子姉は触れた手を見つめながら顔を赤らめていた。一体どうしたんだろう？

それから二人で一緒に色んな本屋を回り、京子姉の買い物を終わらせ、俺たちは近くの公園のベンチで休むのであった。

「さすがに疲れたよ。京子姉」

「あはは、二件だけ回るつもりだったんだけど、恵がいたから色々と回ちゃった」

「まったく、京子姉らしいちゃ、らしいけど……」

俺たちはそれから色々と話した。そんな中京子姉があることを聞いてきた。

「あのさ、恵」

「ん？何？」

「この間書いた短冊。お前はなんて書いたの？」

「ん？まぁ……恥ずかしいから言わない」

「恵の事だからそうだろうと思った。実はさ、あの日の夜にあの短

冊を結んだところを通りかかって……見ちゃったんだけど……」

「見ちゃったって？」

「恵が書いた願い事。」

京子姉の言葉を聞いた瞬間、しばらく俺は固まってしまった。もしかしてあの短冊……見られたの……

「それでさ、私とどう仲良くなりたいか聞きたいんだけど……」

「え、えっと、それは……」

頑張れ、俺、ここで一気に告白をすれば……頑張れ……俺！

「それは？」

京子姉は返事を待ってるぞ。言うんだ。俺、言うんだ。

「えっと、京子姉と手をつなぎたい！！」

「へっ？」

ごめん、告白とか無理だよ。振られたら振られたで嫌だし……というか俺勇気出せよ……

「手を繋ぎたいの？私と？」

「あ、うん、ほら、俺って女装してるけど男じゃん。まだ女子と一緒に過ごすのなれなくって……それになんだか京子姉と距離が開い

てる感じがして……その、」

「ようするにもう少しいろんな事親しくなりたいからそのまずは京子姉とからかなって」

「なんだ、そんな事か。てっきり私は恵が私のこと好きだと思ったんだけど……そうだよな。恵って弟みたいな感じだから、告白されたらどうしようかと思ったよ。あはは」

「あはは、そうだよね。うん」

何かもうある意味振られたような気が……俺は落ち込むと京子姉は手を差し伸べた。

「じゃあ、早く行こうぜ。」

「うん、そうだね。俺は京子姉と手をつなぐのであった

「あれ？あれって、歳納京子と……もう一人はお、男の人！」

俺と京子姉の手をつなぐ所をある人が見ていたのであった。

第十一話　少し進展？（後書き）

とりあえず、まだ告白はさせません。というかさせるつもりはないです。

恵「何で」

告白したら終わっちゃうじゃん

恵「そんな理由」

とりあえず、次は番外編となります。番外編の次は恵と京子のイチャイチャシーンを目撃した人についてやります。まぁ誰かはわかりますが

番外編　初詣（前書き）

二話連続更新なので、本編の次は番外編で初詣となります

番外編　初詣

結衣姉が実家から戻ってきたので、今日は娯楽部のみんなで近くの神社に初詣に来ていた。

「それにしても、一つ突っ込んでいいかな？」

私は京子姉たちにある事を言おうとした。それは……

「なんで晴れ着が私たち一年組だけなの？」

そう、京子姉と結衣姉の二人は普段着だった。すると二人は……

「晴れ着持ってないから！」

と京子姉

「晴れ着とか恥ずかしいし……」

と結衣姉と二人がそういう中、彩はというと……

「あかりちゃん。晴れ着似合ってるね」

「ありがとう～彩ちゃん」

「結衣先輩、私の晴れ着どうですか？」

「あ、うん、似合ってるよ」

彩、ちなつちゃんが自分が着ている晴れ着を自分が好きな人に見せている中、京子姉はというと……

「それにしても、この前も思ったけど……恵って本当に似合ってるよな」

「あんまり似合って欲しくなかったけどね。」

「なんで？可愛いじゃん」

「いやだから……」

ちょっと言い返そうとしたけど、京子姉の笑顔を見て止めた。

「何？」

「何でもない。とりあえず早く行こ……ってみんなは？」

「あれ？」

気がつくとさっきまでいたはずのみんながいつの間にかいなくなってた。残ったのは私と京子姉だけだった。

一方その頃……

「本当によかったのか？」

「いいの、いいの、だってお兄ちゃん夏に告白しようとした以来あんまり進展してないんだもん」

「まぁ、それが恵ちゃんの良いところちゃいい所なんだよね」

ちなつがそう言うと彩は……

「この間だって、わざわざお父さんに嘘ついて、『お兄ちゃんは京子さんと一夜を共にしに行ったよ』って言ったのに、お兄ちゃん普通に帰ってきちゃうし……ここは妹としてサポートを……」

彩の話を聞いて、結衣はというと……

「兄思いだね。それで、見返りとしてあかりと自分の仲を進展させるのに協力して欲しいと思っていると」

「うん、そうだよ。色々とサポートしたからには、私のことも頑張って欲しいと思ってるから」

彩が意気揚々に言う中、ちなつがあることに気がついた。

「そういえば、あかりちゃんは？」

「もう、ちなつちゃん何言ってるのあかりちゃんなら一緒に……あれ？」

あたりを見渡すがあかりの姿が無かった。

「あかり……まさか迷子に……」

何故かみんなとはぐれてしまった私と京子姉。とりあえずお参りするところまで行って、待ってようという話になったので、二人でそ

こへ向かうのであった。

「それにしても、結衣たち、まさか中2になって迷子とは……」

「まぁ、文句言ってもしょうがないし、早く行って待ってようよ」

「そうだな。よーし、恵！迷子にならないように手をつなごう」

「えっ、あ、うん」

私は京子姉の言うとおりに手をつないだ。京子姉の手は意外と温かった。するとそこに……

「あっ、恵ちゃんに京子ちゃん。やっと見つけた。」

「あっ、あかりだ」

「あかりちゃん。お願いだから迷子にならないでよ。ただでさえ影が薄いんだから」

「ふえぇ、ひどいよ。あかり、そこまで影薄くないもん！」

いつもみたいにあかりちゃんを茶化した。そして私達はあかりちゃんにみんなと合流するために奥に行くことを話した。

「そっか、じゃあ、行こう」

「待った。人も多いし、はぐれる可能性あるから……ほら」

そう言って、私はあかりちゃんに手を差し伸べた。

「そっか、手を繋いだほうがいいよね」

こうして私達は三人一緒に手をつなぎながら待ち合わせの場所へと向かうのであった。

待ち合わせ場所にたどり着くとそこには既に結衣姉たちがいた。

「もう、結衣たち迷子になってしょうがないな」

「いやだって、一緒にいたはずのあかりまでいなくなってたから……」

「まぁまぁ、京子先輩。早くお参りしましょう」

「お兄ちゃん……あかりちゃんと手をつないでいいな……」

こうしていつもの娯楽部のメンバーと合流し、みんなと一緒にお参りをするのであった。私の願いはと言うと……

（とりあえず今年も平穏に過ごせますように……あと京子姉と今以上に仲良くなれますように……）

こうして私たちの初詣は終わるのであった

番外編　初詣（後書き）

とりあえず次回から本編に戻ります。それにしても……海の話どうしよう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3396w/

ゆるっと恋をしよう

2012年1月5日18時49分発行